

幼児教育における外国語活動について(1)

木戸 久二子

はじめに

現在、我が国の子どもたちに対する外国語教育の重要性はますます高まってきている。小学校では、平成20年(2008)改定の学習指導要領において、領域の一つに「外国語活動」が新設された。さらには、小学校高学年での英語教科化等を盛り込んだ「英語教育改革実施計画」が平成25年(2013)に公表されている。小学校での英語の教科化に対し、未就学児の保護者が感じる不安は高まっていると思われる。

本稿では、幼児教育における外国語活動—英語教育活動の現状を探ってみたい。

1. 小学校における英語教育の経緯—文部科学省の意向

まず、小学校における英語教育について振り返っておく。

小学校における英語教育は従来、「総合的な学習の時間」等を使って行われてきた。平成20年(2008)改定の学習指導要領において領域の一つに「外国語活動」が新設され、平成23年(2011)度より小学校の新学習指導要領が全面実施されるのに伴い、第5・第6学年で年間35単位時間の「外国語活動」が必修化された。

その「外国語活動」においては、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ことが目標となった。

その後、文部科学省は平成25年(2013)12月13日、初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境作り、並びに小中高等学

校を通じた英語教育改革を計画的に進めるための「英語教育改革実施計画」を公表、「2020年(平成32年)の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、新たな英語教育が本格展開できるように、本計画に基づき体制整備等を含め2014年度から逐次改革を推進する。」と述べている。

その「英語教育改革実施計画」中の小学校に関する部分をまとめると、

- 小学校中学年：活動型・週1～2コマ程度
英語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験することで、コミュニケーション能力の素地を養う／学級担任を中心に指導
- 小学校高学年：教科型・週3コマ程度(「モジュール授業」も活用)読むことや書くことも含めた初歩的な英語の運用能力を養う／英語指導力を備えた学級担任に加えて専科教員の積極的活用

※小・中・高を通じて一貫した学修到達目標を設定することにより、英語によるコミュニケーション能力を確実に養う

※日本人としてのアイデンティティに関する教育の充実(伝統文化・歴史の重視等)

- 小学校における指導体制強化
 - 外部人材の活用促進
 - 指導用教材等の開発
 - 教員養成課程・採用の改善充実
- ということである。

2. 幼児教育における英語活動

ところで、幼稚園教育要領並びに保育所保育指針においては、外国語活動についての記述は一切認められない。これは、遊びを通じての成長を促す幼児教育の世界では当然と言えば当然のことであるが、領域「言葉」の項をはじめ、

幼稚園教育要領並びに保育所保育指針には「日本語」という語が一度も登場しない点には注目すべきであろう。「言葉」を聞き、「言葉」が分かり、使い、「言葉」で表現する等、すべて「言葉」と書かれるのであり、「言葉」＝日本語であることが自明のことと見なされているのである。

それでは、幼稚園における英語活動の実態はどうなのであろうか。

本学児童教育学科 2 年生の幼稚園での「教育実習（後期）」期間（平成 25 年 5 月～6 月にかけて 3 週間）の英語活動について、実習後の学生たちに調査を実施した。それによると、回答した 30 名中、実習期間に 1 度でも英語活動の時間があつたのが 18 名（60%）、なかったのが 12 名（40%）であった。今回の調査では、3 歳児クラスで英語活動を行っていたと回答した実習生は皆無であった。入園間もない時期の 3 歳児にとっては、園生活に慣れることが何より優先されているものと思われる。一つの園で複数名が実習を行った 7 園のうち、3 歳児では英語活動がなかったものの 4・5 歳児では実施していた園が 2 園あつた。また、英語活動があつた 18 名の中で 1 名を除く 17 名は、その英語活動の時間のみ非常勤の ALT（外国語指導助手）がやって来る、と回答している。

自由に記述させた活動内容を見ると、

挨拶・天気を言う

数・色・月・身体部位・食べ物（果物）・動物等の名称を言う

歌（アルファベット、ダンス付き）を歌う
ゲーム（カード使用・ビンゴ）で遊ぶ

自分の気持ちを表現する

ということであつた。挨拶や天気、自分の気持ちを表現する等も見られるが、全体的には、「学習指導要領」2（1）オに挙げられているコミュニケーションの場面や働きの前段階、外国語（英語）の音声やリズムなどに慣れ親しむことが主眼とされている。また、指導要領に見える「国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したこと」・「ネイティブスピーカー」・「CD、DVD などの視聴覚教材」を積極的に活用することは幼児教育における英語活動の場でも行われている。

参考に、M 市の幼稚園において平成 25 年 2 月に行われた英語活動の発表会プログラム（4 歳児）を紹介する。3 歳児では、全員で振りをつけた歌を歌ったり、色・果物等の絵を見せられてその英単語を一斉に答えたり、という形の発表であつた。4 歳児は一斉ではなく、グループで答える形であつた。一方、卒園・小学校入学を間近に控えた 5 歳児クラスになると、一人一人が自分の将来になりたい職業や好きな食べ物・スポーツ等を、絵を掲げて見せながら発表した。

注 1

「小学校学習指導要領」

第 4 章 外国語活動

第 1 目標（略）

第 2 内容

〔第 5 学年及び第 6 学年〕

1. 外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、次の事項について指導する。
 - (1) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
 - (2) 積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。
 - (3) 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。
 2. 日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるよう、次の事項について指導する。
 - (1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
 - (2) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。
 - (3) 異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。
1. 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。
- (1) 外国語活動においては、英語を取り扱うことを原則とすること。

- (2) 各学校においては、児童や地域の実態に応じて、学年ごとの目標を適切に定め、2年間を通して外国語活動の目標の実現を図るようにすること。
- (3) 第2の内容のうち、主として言語や文化に関する2の内容の指導については、主としてコミュニケーションに関する1の内容との関連を図るようにすること。その際、言語や文化については体験的な理解を図ることとし、指導内容が必要以上に細部にわたったり、形式的になつたりしないようにすること。
- (4) 指導内容や活動については、児童の興味・関心にあったものとし、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにすること。
- (5) 指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実施に当たっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制を充実すること。
- (6) 音声を取り扱う場合には、CD、DVDなどの視聴覚教材を積極的に活用すること。その際、使用する視聴覚教材は、児童、学校及び地域の実態を考慮して適切なものとする。
- (7) 第1章総則の第1の2及び第3章道德の第1に示す道德教育の目標に基づき、道德の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道德の第2に示す内容について、外国語活動の特質に応じて適切な指導をすること。

2. 第2の内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする。

- (1) 2年間を通じ指導に当たっては、次のような点に配慮するものとする。
- ア 外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、児童の発達の段階を考慮した表現を用い、児童にとって身近なコミュニケーションの場面を設定すること。
- イ 外国語でのコミュニケーションを体験させ

る際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること。

- ウ 言葉によらないコミュニケーションの手段もコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、ジェスチャーなどを取り上げ、その役割を理解させるようにすること。
- エ 外国語活動を通して、外国語や外国の文化のみならず、国語や我が国の文化についても併せて理解を深めることができるようにすること。
- オ 外国語でのコミュニケーションを体験させるに当たり、主として次に示すようなコミュニケーションの場面やコミュニケーションの働きを取り上げるようにすること。

〔コミュニケーションの場面の例〕

(ア) 特有の表現がよく使われる場面

- ・あいさつ
- ・自己紹介
- ・買物
- ・食事
- ・道案内

など

(イ) 児童の身近な暮らしにかかわる場面

- ・家庭での生活
- ・学校での学習や活動
- ・地域の行事
- ・子どもの遊び

など

〔コミュニケーションの働きの例〕

(ア) 相手との関係を円滑にする

- (イ) 気持ちを伝える
- (ウ) 事実を伝える
- (エ) 考えや意図を伝える
- (オ) 相手の行動を促す